

2. 調査の概要

今年度の発掘調査では、室町時代（約 600～500 年前）の水田、平安時代（約 1,200～1,100 年前）の掘立柱建物・畠、飛鳥時代（約 1,400 年前）の土師器や祭祀に使う手づくね土器が発見されており、現在は縄文時代後期（約 4,000～3,000 年前）の遺跡の調査を行っています。

（1）縄文時代

これまでの発掘調査で、土坑やピットなどが発見されています。土坑の中には、長さ約 134 cm、幅 77 cm、深さ約 19 cm で掘り込み、平たい川原石を立ててあるものがありました。中からは後期前葉の土器が 1 点出土しました。今後検討が必要ですが、この土坑は墓（土坑墓）の可能性があります。また立てられていた川原石は周辺の地層には含まれていませんので、縄文人が川原から拾ってきたものと考えられます。このほかアスファルトの塊が土坑から出土しています。

出土したさまざまな遺物からは、縄文人の活動の一端をうかがうことができます。土坑から出土したアスファルト塊は主に接着剤として利用されました。石鏃・銛などを柄に取り付け、土器や土偶の補修にも利用されますが、下割遺跡でもアスファルトが付着した石鏃や土偶が出土しています。日常使用する道具では縄文土器のほか、磨製石斧が出土しています。磨製石斧は製品が多く出土しましたが、未製品もごく少数出土しました。また製作に使用するヒスイ製の敲石も出土したことから、磨製石斧を製作していた可能性があります。このほかに土偶や石棒など、祭祀に関連する遺物も出土しています。調査範囲が限定的なため、堅穴建物や掘立柱建物などは発見されていませんが、出土した遺物からは、狩猟に出かけ、獲物を調理し、木材から道具を作り出す縄文人の姿が思い浮かびます。また土偶や石棒などの祭祀に関連する遺物が出土したことから、さまざまな祭祀を行いつつ、日々の生活を過ごしていたと思われます。

今年度は 9 月から縄文時代の調査を開始し、縄文土器などが出土し始めています。今回の調査により一層縄文時代の様子が明らかになることが期待されます。また、縄文時代の遺跡は現地表下約 4 m に埋没していますが、今回その現地を公開し、縄文時代の調査の様子を見学していただきます。

（2）飛鳥時代

今年度の発掘調査で、祭祀に使う手づくね土器が 8 個体出土しました。口径約 5.5 cm、高さ約 3.5 cm と小さく、手でこねて製作した痕跡が土器の器面に残っています。手づくね土器は祭祀遺構から出土することがあり、8 個体まとまって出土した状況から、祭祀の跡と思われます。このような手づくね土器や祭祀の跡は昨年の調査でも見つかっています。

手づくね土器の出土地点から約 27 m 離れたところから、煮炊きに使う土師器の甕と、液体などを貯蔵する須恵器の甕が一緒に出土しました。その状況を詳しくみてみると、土師器は横倒しのような状態で、須恵器は破片の内側を上に向かたような状態で出土しているようです。このほかにも土師器の甕が単独でつぶれた状態で出土しました。飛鳥時代の遺構は大変少なく、昨年の検出した建物から約 30 m 離れています。手づくね土器も含め、土師器や須恵器が建物などの遺構から離れて出土しており、その性格など、今後検討する予定です。

3. まとめ

上越地方では、丘陵やその周辺を中心に縄文時代の遺跡が分布しています。下割遺跡の直近 4 回の発掘調査で、高田平野中央の地下約 4 m で縄文時代の遺跡が見つかりました。このことは高田平野の平地部でも縄文人が活動していたことを示しており、その活動の一端がうかがえる貴重な成果といえます。

しもわり 上越市 下割遺跡（11 次）現地説明会資料

令和 5 年 9 月 23 日（土）

国土交通省北陸地方整備局高田河川国道事務所
公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

1. 遺跡の立地

下割遺跡は、高田平野のほぼ中央、飯田川左岸の沖積地に立地し、現地表面の標高は約 14 m です。東西 950 m、南北 750 m にも及ぶ広大な遺跡で、上越三和道路建設に伴い平成 14 年から発掘調査を開始し、今回で 11 回目の調査になります。これまでの調査で、地下約 4 m まで堆積している地層の中に室町時代（約 600～500 年前）、平安時代（約 1,200～1,100 年前）、飛鳥時代（約 1,400 年前）、古墳時代（約 1,700 年前）、縄文時代後期（約 4,000～3,000 年前）の遺跡が重なっていることがわかっています。そのうち、地下約 4 m に埋没している縄文時代後期の遺跡は、上越地域の平野部における縄文人の活動を考えるうえで重要な成果です。



縄文時代の遺構と主な出土遺物

